

元桃山学院短期大学学長 太田雅夫先生

### 「戦後同志社の群像」

太田先生は 50 年代初期に同志社大学法学部で学ばれ、田畑忍先生、和田洋一先生、岡本清一先生などの教えを受け、同志社大学の学友会や自治会の役員のメンバーとして活躍された。



当時は朝鮮戦争下で、警察予備隊（今の自衛隊）の創設や破防法の制定が計画されていて、戦後の右転回が進んでいた時期にあたる。日本が占領下におかれた時期でもあり、学生たちの危機感と警察の武力一辺倒の鎮圧は、今からみても時代の問題かと思われる。

太田先生は同志社大学の人文研で研究を続け、後に桃山学院大学短大の学長、桃山学院大学教育研究所長を勤められた。今は大学生協研究会のメンバーでもある。

「平和に生きる会」の足跡と『50 年代の群像—同志社の青春』の出版は、当時の青年の息吹を伝えるとともに、同志社大学の良心を示すものでもあろう。

お話し 太田雅夫先生（○と略）

聞き手 名和又介先生（京都事業連合理事長、京滋・奈良ブロック会長、Nと略）

**N** このたび、先生が出された『50 年代の群像—同志社の青春』を興味深く拝見しました。あまり知られていない内容で、かつ貴重な証言に驚きました。50 年代の学友とご一緒につくられましたがそのきっかけはなんでしたか？

**○** これまで「平和に生きる会」の会合が続いてきましたが、一昨年の会合で、「みんな年を取ったのでそろそろ終わりにしようじゃないか」ということで、本にまとめることにしたわけです。

そこで田中貞夫さんが中心になって項目を立てて、「平和に生きる会」メンバーで教職に関わっている者についての章と、特にお世話になった 5 人の恩師を偲ぶ章にまとめようということになり、この二つの章の引き受け手を探しましたが、結局自分の所にまわってきたわけです。

私は 1950 年（昭和 25 年）4 月に入学し、6 月には朝鮮戦争がおこりました。そういう

なかで榊原胖夫さんと、そのあと代表をしていただいた池本幸三さんたちが中心になって、「平和に生きる会」を組織しました。その会では田畑先生の子息の耕治さんが、最初に代表になりました。

わたしは教養学部の自治会委員となり、2年のときに法学部自治会委員、3年で法学部自治会委員長をやりました。そのころちょうど破防法闘争があったわけです。先頭に立って東京にオルグにいき、東大教養部、東京学芸大学、お茶の水女子大でもストライキを組織させ、翌日、早稲田大学での都学連の決起集会に参加し、トップバッターとして京都の各大学の破防法粉碎の闘争の報告をしました。

- N** 先生が生協研究会でお話しされて居たことで、学友会として同志社生協づくりに関わられた経緯がよくわかりました。また平和の会の関わりについて、その当時和田洋一先生が「君たちは何もしなくていいのか」といわれた経緯がこの本に書かれています。和田先生は、北朝鮮問題についても当時から「あの状態ではいけない」と問題意識を持っておられたようです。その意味でも和田先生は、はきはきとものを言われるだけでなく、先見の明をお持ちであったことがわかります。朝鮮戦争の勃発が「平和に生きる会」の活動のきっかけになったわけですか？
- O** 危機感をいだいて最初に動いたのが歴史研究会の榊原さん、池本さんの先輩たちでした。
- N** 1951年に弘風館で、京大に次いで原爆展を3115名の参加で開かれましたね。この時期に開かれた原爆展という点で大きな意義がありましたし、京大、同志社を中心に運動が広がりました。後に日本生協連に行かれた竹本成徳さんもご一緒でした。この動きに同志社の「キリスト者平和の会」が同調しました。先生の平和に生きる会は、戦争反対、平和憲法擁護、核兵器使用反対、この3つに賛同すれば誰でも入会できたのですね。
- O** 破防法反対の同志社の最初のデモとして、大学から若王子の新島先生の墓に向かいました。そのとき一緒に参加したのが岡本清一先生、前田一良先生、小倉襄治先生たちでした。実は前田一良先生の奥さんの妹さんは、私の高校時代の同級生でした。
- N** その前後に京大で事件がありましたね。昭和天皇が大学に来られた時に学生が平和の歌を合唱して直訴を試み、そのあと同学会は解散、中央委員は無期限休学処分となり、当時京都府学連委員長であった大島渚さんが京大から追い出され、同志社大学に府学連の事務局がおかれたということもありましたが・・・。
- O** 大島委員長のほかに、立命大から習田さん、京大から坂東さんの3人が中心で、府学連が同志社大学の中に事務所を構えていました。その時代から私は住谷先生、田畑先生、

岡本先生、前田先生などいろいろな交流がありました。

**N** 同志社大学生協の成り立ちについて、53年1月に任意団体となり、当時院生であった竹本さん、新聞局の友定さんらが活躍されたということですが、法人化したのはその後でしたね。

**O** 当時の学館食堂は磯田さんが経営していて、その彼女がそこに住み着いているという状況でした。そこで学館を我々の手に取り返して協同組合をつかって、そこで食事を提供したらどうかという意見が出てきたわけです。しかし戦前から校友会長と磯田さんとは深い関係があったのでなかなかうまくいきませんでした。そのころ明徳館地下に食堂ができましたが、これは協同組合的なかたちで運営しようということになりました。学館食堂の磯田さんには出て行ってもらおうと座り込んで、徹夜で大会をやったわけですが、そのときの決起集会の議長は自分がやりました。翌日、実力行使をして、食器類を食堂から理事長室に運び込もうとしたのですが、その途中、致遠館の階段のところに田畑先生があらわれカンカンに怒っておられました。

そのとき私は法学部自治会委員長をしていたものですから、先生は私に向かって「君ならわかるだろう！」と言われました。ようやく話がついてわれわれは食器類を元の場所に戻すことにしました。実は竹本成徳君はバレー部で、体育会に所属していましたが、学館闘争のとき偶然われわれといっしょになり、そのあとバレー部を離れて岡本ゼミのグループに入りました。

**N** そのころは社会問題に目をむけて、学外に出ていくこともあったのですね。

**O** 内灘基地反対闘争がありましたし、近江絹糸の争議には同級生やその後輩の女子学生が中心になって活動していました。当時京都女子大学から同志社の学部に移ってきた土井たか子さんは一粒寮にいました。実は私の亡き前妻は、革新系の市会議員をやっていたことがあるんです。当時、わたしたちは田畑先生に仲人になっていただき学生結婚しました。

**N** そのころ、経済状況などを理由に学業を続けられない学生が少なくないなかで「友の孤立を放置するな」と同志社救援会が組織されましたね。

**O** なかには闘争の中で逮捕された学生もあり、彼らの支援もおこないました。救援会の中心になったのは岡本ゼミの北川雅一さん、もう一人は自ら結核の闘病経験がある井上勲さんでした。

**N** そのころ九州を風水害が襲い多くの学生の実家に被害が出たときも救援会が活動をおこない、それらが後の私立大学助成（または学生健康組合）につながっていったのではないのでしょうか。

**O** その時の生協理事長は、島田啓一郎先生でした。私が大学卒業の時、同志社大学が学生主事補を募集していて、私と原田亨さんの二人が大江直吉学生課長、駒井四郎厚生課長らの面接を受け採用となり、私は学事課勤務として田畑学長の秘書となりました。そして卒業式翌日から勤務が始まりましたが、その直後に息子さんの事件があり、田畑先生は辞任されました。それから新学長が決まった後に、私はもっと勉強もしたいということで、Ⅱ部の学生部勤務を希望し、昼は立命館大学大学院で勉強することにしました。

**N** それから 57 年暮れには、同志社大学生協は法人格を取得しました。その時これからは実務をできる人が必要だということで、当時神戸生協におられた横関武さんと呼ばれ、かわりに竹本成徳さんが神戸生協に行くことになりました。それから 64 年の暮れに洛北生協、現在の京都生協が誕生しました。横関さんの最初の仕事は生協牛乳の産直事業でした。

**O** 横関さんの奥さんになった石丸初恵さんは、当時学友会三役の一人で、白石道春君が中央委員長、私が学友会副委員長で、石丸さんは会計担当でした。彼女は友人のお父さんの公認会計士のもとで一生涯懸命勉強されていました。

それから、学生時代に学友会の中央委員であった増田誓治さんは、全学連に派遣され全学連の副委員長となりました。後に彼は同志社生協常務理事となり、そのあと府立医大府大生協の専務理事を務められました。

**N** そうすると竹本さん、横関さん、増田さんは総て同志社で、また先生と関係があったということですね。この間、東日本大震災への支援を大学生協として取り組んでいますが、原爆の問題でいうと竹本さんは広島で被爆されていますね。

**O** 竹本さんの奥さんは同志社生協の職員でしたが、亡くなられました。娘さんは声楽家で、息子さんも東京で活躍されているようです。

広瀬方人さんは 2 年先輩で榊原さん、池本さんの同級生でした。後に岩波映画で活躍され「戦争レクイエム三部作」をつくった黒木和雄さんは、教養学部に入った後 2 年から法学部学生になりました。あるとき私は、法学部政治学科への進学希望者を集めようと、希望者を当時の朝日会館にあった喫茶室に集めたところ、彼はそこへ現れました。それが彼に会った最初でした。そこで竹本さん、黒木さんら、小野昭男さんらと岡本清一ゼミに入ったわけです。後、黒木夫人になる稲垣暢子さんや、梅村トミ子さんもクラスメ

ートでした。

N 82年に京都ロイヤルホテルで、「50年代同志社平和の会」が開催され、以降15回の総会開催、2冊の追悼集、3冊の文集を発刊されました。

O 30年ぶりに恩師と共に集まろうということで行いました。その後、和田先生がお亡くなりの際は教会の葬儀に参列しましたが、田畑先生のご葬儀については当時シカゴ大にいたため参列できませんでした。

N 桐生悠々に関しては、かなり早い段階から研究をされてきていますね？

O 70年、40歳のときに和田先生が責任者となっておられた人文研の研究会で、反戦ジャーナリストとして彼をとりあげたのが始まりです。人文研については大学紛争時から関わってきました。封鎖などで学内が使えないときに鶴見俊輔さん、北村信隆さんらと「自由大学」をつくって勉強してきました。60歳のときには、桐生悠々について、私の業績が、朝日新聞に大きく取り上げられました。

N 先生はその後、桃山学院に移られてご活躍されました。それも一教員というだけでなく行政畑でもお力を発揮されましたね。

O 桃山学院で20年間勤務しましたが、その後半は短期大学の学長をしていました。地方の短大の経営は厳しく、最後は理事会が短大閉鎖を決めたのですが、そのとき私は「一人も首を切るな」と主張して、世話できる人には他大学や研究機関に世話をしつつ、その他は桃山学院教育研究所の研究員になってもらって、結局一人も首にはなりませんでした。

N 桃山学院をお辞めになったあとも、吉野作造研究にかかわってこられましたね。

O 吉野作造記念館をつくる段階からかかわってきて、審査委員長的な立場で懸賞論文の審査員を2年に1回してきました。

N 先生はいろんな分野のメモ、資料を豊富にお持ちになっておられますね。ところで同志社大学で、格別印象に残る先生をあげるとどなたになりますか。

O 特に住谷悦治先生、田畑忍先生、岡本清一先生、それから高橋貞三先生、中桐大有先生、このお二人は私が所属していた弁論部の顧問でした。

**N** こうして伺ってみますと、先生は波乱万丈の人生をおくってこられたということになりますね。ところで、現在の生協に対して先生から一言、お言葉をいただけますでしょうか。

**O** 私の学生の頃と比べてみても、メニューは豊富になったし、購買、書籍も充実するなど相当進歩してきていると実感します。私たちのころは、自分でうどんを作ったりしたこともある時代でしたから・・・。同志社生協は輝かしい歴史を持ち、竹本成徳さん、横関ご夫妻をはじめ多くの方が、関西や全国各地で活躍され尊敬され、全国の中でも際立っている、と認識して誇りをもち、今後のご活躍を期待しています。

**N** 生協で働く人たちは、誰しも志をもって入ってきたわけですから、先輩方のご活躍や生協の過去の歴史などをもっと知ってほしいし、もっと知らせる工夫をすべきと思います。また同志社全体としても、同様の課題があるように思います。

本日はお忙しいところ、先生にお話をいただきありがとうございました。

(2011年11月21日インタビュー)